

令和3年度

# 高浦中学校 「学力向上実行プラン」

【各校の取組状況の把握について】

## 学校の教育目標を踏まえた学力向上の重点目標

- 授業目標の明確化と問題解決過程の重視
- GIGAスクール構想の積極的活用による、ICTを利用した授業展開
- 「家庭学習の手引き」・「自主学習ノート」を活用した、家庭学習の充実

## 学力向上検討委員会構成

学力向上推進員	委員	校長 立岩一彰, 教頭 中南弘史,
教諭 鎌田 幹大		教諭・教務主任 後藤真治, 指導教諭・第1学年主任 桑村裕佳, 教諭・第2学年主任 板橋典子, 教諭・第3学年主任 大石敏

校長

立岩 一彰 印



### (1)知識・技能の習得

授業公開や教員からの報告等、様々な機会を捉え、取組状況の把握を行う。

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○基礎的・基本的な内容について定着している生徒が多い。落ち着いた態度で与えられた課題に対しては意欲的に取り組むことができる。 ●定着が十分でない生徒に対して、反復学習の定着を図り、個別指導の充実が必要である。	・基礎的・基本的な知識・技能を確実に身につける。 ・習得した知識が、既習の知識と関連付けられ、他の学習の場面で活用することができる。	・英(1年)数(3年)で T.T指導を展開し、定着が不十分な生徒の個別指導を充実する。 ・基本的な内容が復習できるプリント・ワーク等を課題とし、小テストを随時行う。 ・活動ごとや単元ごとに、ノート等の精度を確認する。 ・ICTを活用し、個々の理解の状況に応じて、基礎問題や応用問題を設定する。	・国語科において、循環式の学習習慣の確立により、漢字力向上をめざす。 ・数学科において、計算問題の反復練習の機会を多く設定する。 ・ICT活用の機会をさらに多く設定する。	各教科における「知識・技能」の観点でAまたはB評価の生徒の割合は、約94%だった。	小テストや定期テストの結果から、基礎基本的な内容については多くの生徒が定着を図ることができたと思われる。しかし、学力に個人差があるため、引き続き苦手意識のある生徒に対しての個別指導を充実させる必要がある。また、ICTを効果的に活用するための、授業方法の改善や工夫を各教科において考える必要がある。

### (2)思考力・判断力・表現力等の育成

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○ワークシートを工夫したり、配慮しながらペア学習・班活動を取り入れた授業を展開した結果、表現活動を楽しみ、自分なりに工夫する姿が見られる。 ●自分の考えや気持ちを文章では表現できるが、積極的に発言する生徒が少ない。	・課題解決に至る過程を表現することができる。 ・さまざまな事象を関連づけたり、学習した内容を組み合わせることで考えを深めたりすることができる。	・授業の目標を明確化するとともに、授業の流れが分かる板書・ワークシートを工夫する。 ・従来型のアウトプットの場面を多く設定するとともに、タブレットを効果的に活用し、一人一人が意見や考えを表現する機会を作る。 ・キャリア教育の充実を図り、様々な体験活動を通して表現力を高める。	・国語科において、条件作文の書き方を習得するためのワークシートを工夫する。 ・数学科において、記述式の説明の力をつけるため言葉で説明する機会を多く取り入れる。 ・タブレット活用の機会を多くする。	各教科における「思考力・判断力・表現力」の観点でAまたはB評価の生徒の割合は、約90%だった。	国語・数学のみならず、その他の教科や様々な学校行事において、表現の場が設けられており、生徒たちも意欲的に取り組むことができている。引き続き、すべての教育活動での表現の充実をめざし取り組みたい。また、更なるタブレットの積極的活用により、コロナ禍での、充実した意見交換が必要である。

### (3)主体的に学習に取り組む態度の育成

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○課題等の提出率は高い。また、定期テスト前の学習にも、多くの生徒が目標を掲げ、意欲的に取り組んでいる。 ●自ら課題を見つけ、自分なりの目標をもって学習に取り組むことが苦手な生徒がいる。	・「家庭学習の手引き」を活用し、授業で学んだことを自分のものとするために必要な家庭学習ができる。 ・ある事象に対し、自ら疑問を抱き、その疑問に対して、自ら調べることができる。	・学期ごとに家庭学習充実月間を設け、「自主学習コンテスト」を行い、家庭学習の質の充実を図る。 ・課題の設定を明確にし、課題解決に必要な情報を、インターネット等の活用により、取捨選択させる。	・自主学習コンテストの結果から、選ばれた生徒の作品を各学級に掲示し、今後の自主学習の参考となるようにする。 ・課題の設定を明確にし、タブレットの積極的活用を図る。	『自主学習ノート』や課題の提出率は、約85%であった。	多くの生徒が家庭学習の習慣が定着しており、与えられた課題に対しては真面目に取り組むことができている。しかし、自発的に課題を見つけ取り組むことが不十分であるため、その働きかけの工夫が今後の課題である。また、タブレットの活用により、いつでも課題の提出や進行状況を把握できるようにすることが、家庭学習の充実につながると考えられる。

## 令和3年度 学力向上ロードマップ

